

# 不良に殺された貞女

——歸有光が彼女について書いた理由——

材 木 谷 敦

序

0 「書張貞女死事」と「張貞女獄事」

2 対象としての望ましき

3 結び

## 0 序

歸有光『震川集』に収める「書張貞女死事」「張貞女獄事」「張貞女神異記」「貞婦辯」「祭張貞女文」「招張貞女辭」「答唐虔伯書」「與李浩卿書」「與嘉定諸友書」「與殷徐陸三子書」は、全て、殺人事件の被害者である張という女性に關する言説である。『明史』卷三百一「烈女傳」に見える彼女についての記事は、「書張貞女死事」に基づいているようである。

張女という對象は、歸有光言説において、量的にも、質的にも、一定の重要性を持つていると見受けられる。そう見るならば、歸有光が張女に關心を持った理由は、歸有光という書き手を檢討する場合、無視できないと考えられる。ある書き手がある對象に關心を持った理由は、言説が書かれた後では、その書き手がその對象について書いた理由と等價である<sup>(1)</sup>と見なし得る。それ故、本稿では、歸有光が張女について書いた理由を檢討してみたい。

歸有光は、事件を起こした不良たちが張女の不貞をでっちあげた上に不正な手段によつて罪を免れようとしているらしいことを嫌い、友人らに手紙を書いて事件への注意を喚起し、張女の恨みを晴らすため協力するよう求めている。庄司莊一氏は「張貞女の死——明代の士大夫歸有光と民衆——」にお

いて、歸有光の行動と事件の経過に關心を拂い、「烈女表彰の記録者歸有光を支えた民衆との共感という事實」<sup>(3)</sup>について考察する中で、歸有光の行動の原因を、「歸有光自身の士大夫身分にもとづく良心のうずきであるといつてよいであらう」<sup>(4)</sup>とし、事件發生地である安亭の市隱の連帶や庶民の意見を、歸有光の行動の重要な背景と見る。これはもとより示唆に富む議論である。しかし、本稿は、歸有光の行動ではなく、特に歸有光という書き手とその言説に關心を絞って検討を進めることにする。

以下、『震川集』は臺灣商務印書館一九八六年七月初版『景印文淵閣四庫全書』（以下『四庫』）による。引用は拙譯により、必要に応じて原文を示す。

## 註

- (1) 中華書局一九七四年四月第一版第一次印刷『明史』七七〇〇頁
- (2) 高野山大學密教研究會一九七四年二月發行『密教文化』第一〇八號。
- (3) 前出『密教文化』十六頁。
- (4) 前出『密教文化』二十九頁。

不良に殺された貞女（材木谷）

## 1 「書張貞女死事」と「張貞女獄事」

歸有光が張女について書いたのは何故か。このことは張女の巻き込まれた事件の在り方と無縁ではない。しかし、ここでは、事件の概略を説明しても意味はないし、言説を整理して事件の真相を求めてもやはり意味がない。歸有光という書き手とその言説への關心からする本稿においては、歸有光の認識や言説そのものの方が重要だからである。そこで、冒頭に挙げた言説の内、事件の経過を主とする「書張貞女死事」と、裁判の経過を主とする「張貞女獄事」を、譯出してみたい。

張貞女は、父親を張耀<sup>(1)</sup>と言ひ、嘉定縣曹巷のひとつだつた。汪客の息子のもとに嫁いだ。汪客は嘉興縣のひとつで、安定に假住まいしていた。汪客の妻はしばしば他の男と密通していた。汪客は年老いており、酒好きで、毎日酔つ拂つて、反省することがなかった。

不良少年たちが、しばしば汪家に入り込んで酒を飲んでゐた。汪客の息子が妻を娶つた時も、不良たちはみなこの家の部屋の中におり、果物や酒肴を用意して宴會をしていた。汪客の妻は、全員に挨拶するよう嫁に命じたが、貞女は拒んだ。

次第に姑の行動を知り、夫にこつそりと「誰それはどういうひと？」と言った。夫は「父の親友や知り合いで、もう長いこと行き来がある」と言った。貞女は「親友なのに、何てことをしているの？ あなたは大人なのに、お母さんがこんな風で恥ずかしくないの？」と言った。

ある日、汪客の妻は不良と一緒に入浴した。嫁を呼んでお湯を持つて来させると、嫁は男がいるのを見て驚いて逃げた。こうして、實家に歸り、數日間泣いていたが、誰もその譯を聞けなかった。母親がどうしても聞き出そうとすると、詳しく話した。しばらく経つと、汪客の妻は偽つて調子のいいことを言い、貞女に謝つたが、貞女が行くと手ひどく辱めた。貞女は、不良たちを来させないようにと、いつも泣きながら夫に頼んだ。また機會を見ては「お義父さんも、お酒を控えた方がいいですよ」とそれとなく汪客に忠告した。結局、汪客父子は變わらず、逆に汪客の妻に告げ口し、「汪客の妻は」その度に「貞女を」鞭打ちした。

不良の中に胡巖という者がいて、最も亂暴で狡猾だった。仲間は彼には頭が上がらず、その指圖に従つた。ある日、胡巖は仲間たちに「汪の婆さんはもう年だ。俺たちとしては財産を當てにしたり酒を飲んだりするくらいのものだ。新しい嫁

さんは本當に美人だ。俺はもう姑と寝ているんだから、嫁さんは逃げられないだろう」と言つた。そうして、中に入つて汪客の妻に「若奥さんは付き合ひが悪い。胡巖さんと寝たら、喜んでひとつ家の家族になるだろう。俺たちが樂しむ分には誰も何も言わないだろう」と言つた。汪客の妻もそう思い、策を弄して息子を縣の裁判文書の見習に出した。

汪客の妻は貞女に手ぬぐいを織らせ、密通相手の下男に贈ろうとした。貞女は「ただの下男でしよう？ 下男に手ぬぐいを織つてやることなんてできません」と言つた。汪客の妻はますます貞女を疎ましく思つた。胡巖たち四人は、二階で酒を飲んでゐた。それで貞女を呼んで酒を飲ませようとしたが、貞女は應じなかった。胡巖は後ろから金屬製の梭を擲んだ。貞女が泣きながら罵つたので、返すと、梭を折つて床に投げた。汪客の妻は自分の梭をやつたが、この梭も折つてしまった。結局その場はそれで終わった。

しばらくして汪客の妻が入浴していると、胡巖が來て一緒に入つた。上がつてから、汪客の妻は「今日は嫁と寝なさい」と言つた。胡巖は中に入つて貞女を犯そうとした。貞女は「人殺し、人殺し」と大聲で叫び、杵で胡巖を殴つた。胡巖は怒つて逃げ出した。

貞女は部屋に入って體を床に投げ出し、夜通し泣き續けた。翌日は息も絶え絶えだったが、夕方になって少し回復すると、激しく泣いた。胡巖と汪客の妻は惡事が露見するのを恐れ、貞女をベッドの足に縛って見張っていた。翌日、不良たちを呼んで酒を飲み、二更の時に全員で貞女を縛り、椎や斧で打った。貞女は苦しんでのたうちまわりながら、「刃物でひと思いに殺して」と言った。ひとりが前に出て貞女の首を刺し、もうひとりが貞女の脇腹を刺し、陰部を切り取った。全員で死體を持ち上げて燃やそうとしたが、死體は重くて持ち上げられない。そこで火を點けて部屋を燃やした。

近所から消火に來たひとは、足で死體を蹴り、手足がバラバラの死人であることに氣付いた。それでみな驚いて知らせた。不良たちはみな逃げた。その内のひとは、「俺は鐵椎であの女を四回殴ったけど、それでもまだ死ななかった。人間てのはなかなか死なないんだね」と、ひとにこっそり語った。貞女は、死んだ時、たった十九歳だった。嘉靖二十三（一五四四）年五月十六日だった。

役人は下女と不良たちを逮捕して取調べをした。下女はひとりひとり指さして「誰それが私の姉さんを縛って、誰それが椎で打って、誰それが刃物で刺したんです」と言った。汪

不良に殺された貞女（材木谷）

客の妻は「私はお前らなんて當てにしないよ。お前らは姑が嫁を殺しても罪にならないなんて言っていたけど、このざまはどうだい」と不良たちを罵った。汪客の妻はまもなく獄中で死んだ。

貞女はしとやかでやさしく、姑には丁寧<sup>ていねい</sup>に仕えた。虐待されても、恨み言を言ったことがない。惡さをけしかけても、ひとり白刃を踏み堂々としていた。立派であると言うべきである。そもそも、惡人どもが寢室で汚い眞似をしたわけだが、このことを問題にすると恨まれる恐れがある。問題にしなれば我慢することになる。そもそも、こういうことに對處するのは、特に難しい。嫁となつてから死ぬまで一年を越えているが、汪家にいたのは五ヶ月に過ぎない。あるひとは、もつと早く死んでいてもおかしくなかったと言う。ああ、死ぬことは簡單ではないのだ。

嘉定にはもともと烈婦の祠（原文「烈婦祠」）がある。貞女の死ぬ三日前、祠の近所のひとはみな、空からの鼓樂の音を聞いた。祠では、燃え盛る炎が柱の中から出て來た。ひとびとは、貞女の死の豫兆だったと思っている。私は安亭に來て、この事件を知り、貞女がまだ年若いのにそのようにしつかりしていたことに感心し、身の引き締まる思いがした。それで

何度も調べた上で事の次第を記録し、史官の採擇に備えるものである。

（「書張貞女死事」<sup>4</sup>）

最初に、胡巖父子が貞女を殺す計畫を立てた。下男の王秀という人物は、前から汪客の妻とできていたが、後に下男を辭めて出ていった。胡巖は王秀を金で釣った。もともとは、死體を燃やして證據を隠滅しようとした。さらに貞女と王秀が密通して自殺したかのようにでっち上げようとした。犯行の狙いはこのふたつである。

思うに、最近、有力者がひとを殺すと、死體を奪つて燃やしてしまうことがよくある。役人は、證據がないことによつて、毎回不問に付している。だから、ひとを殺すと往々にして死體を燃やす。役人たるもの、わきまえておく可きである。

火が放たれると、ひとが消火に來た。胡巖は裸でわらじを履いていた。服が血まみれになつて、着替えがなかったからである。「胡巖さん、こんなことになつちやつて、どうします?」と言う者もいたが、胡巖は睨み付けて「何があつたと言うんだ」と言つた。すぐに汪客を縣廳に行かせたのは、貞女のことを誣告させるためであるようだ。たまたま汪客は酔つ

て縣廳の門外で寢込んでしまい、貞女の父である張耀が先に入つて告訴してしまつた。張耀は氣の弱いひとだった。その妻の父は胡巖から金を受け取り、張耀に朱旻だけを告訴させようとした。

典史が檢分に來た時、胡巖は平氣で外におり、取り調べ係に賄賂を渡した。貞女の咽喉の下には指が二本入るほどの刺し傷があり、まだ血が迸つていた。檢死役はその首を引き裂いて、「傷はない」と偽つた。衣服を全て取り除くと、皮膚は、腫れが青黒い筋になつており、刺青のようだった。脇腹と下半身は刀傷だらけで、血が流れていた。ひとびとはみな無實の罪を訴えた。檢死役に襲い掛かる者もいた。

檢死役が賄賂を受け取つたことは、縣令も知つていた。しかし、少し咎めただけだった。ある日、縣令は晝寢をして夢を見た。金の鎧を着けた神が、兩脇から血を流し、刀を持つて進み出て「殺したのは胡鐸と胡巖だ。この裁判を速やかに結審させなければ、おまえの心臓を刺す」と言つた。縣令は驚いて起き上がり、部下に尋ね、胡巖とその父である胡堂の存在を知つた。それで、「堂」と「鐸」は音が近いために間違つたのだらうと縣令は思つた。下女を逮捕して取り調べをして、とうとう胡巖らを收容した。

これに先立ち、汪客の妻は千金を胡巖の家に全部預けていた。このため、胡巖にとつては金で釋放を要求する條件がますます整っていた。時に、張副使という人物がおり、役所を辭めて家居していた。喪に服していた丘評事とふたりでいつも縣廳に出入りしていた。縣令はこの二人に尋ねた。張は丘を顧みて「法司としてはどう思われますか」と言った。丘は「女性をひとり殺したということで四、五人を處罰するのは、監司への上申が難しい」と言った。

思うに、縣令は新人が多く、法律に暗い。また判決を御史に伝える際、意見されて評判を落とすことを氣にするのが常である。それで「胡巖らは、張と丘を利用して、縣令を」惑わせたのだろう。縣令は、案の定、方策を尋ねた。ふたりは、下男が家長の妻を犯したのだから、法的には王秀を罰すれば充分であると教示した。このため、事件の扱いはますます甘くなり、胡巖たちはみな手足を縛らずに投獄された。十五日後に貞女の檢死をもう一度行くと、胡巖らを釋放した。

たまたま縣令が縣學に出向くと、學生たちは大義を訴えた。縣令はそれでようやく恥じ入るところあり、縣廳に歸るとすぐに胡巖らを召喚した。胡巖らは釋放してもらえろと思ひ込んでいた。「張・丘の」ふたりも縣令の法廷に同席し、判決が

下りたらすぐに金を持つて歸ろうとしていた。縣令は突然胡巖らを縛り、朱墨を顔に塗り、安亭に連行し、さらに遣いを出して貞女を祭らせた。「張・丘の」ふたりは互いに顔を見合わせると血相を變えて逃げた。

安亭では町中みな大喜びだった。時に、江蘇では旱魃で、四月から六月まで雨が降らなかつたが、ここに及んで注ぐような大雨が降った。胡巖は看守にも賄賂を渡し、獄中で汪客の妻を殺した。こうして口を封じようとし、なおかつ金を全部隠した。縣令は胡巖の仕業であろうと疑った。しかし看守を少し咎めただけだった。これに先立ち、貞女の死に際しては、たくさんさんの怪異「原文「神怪」」が発生していたが、事ここに至り、汪客の妻の死體を市中に曝すと、汪客が棺を持ち出し、密かに死體を收めようとしたが、何百もの幽靈が汪客を追いつつた。

縣令は、なおも「張・丘の」ふたりの言のせいで、「未決の容疑者たちの罪を」許して從犯扱いにしようとしたが、下女は周綸を指差して「確かに椎で貞女を打ちました」と言い、再三取調べをしても供述を變えないので、縣令は如何ともしがたく、朱旻だけを免罪した。朱旻もその晩に實際に殺しに加わっていた人物であり、戸外で様子を聞いていただけではな

い。判決文が出来上がってしまったても、「張・丘の」ふたりはまだ炎天下を駆けずり回り、舟を自分の居住地の數里先に泊め、一日中策略を練った。丘は「私が大理寺に行ったらこの判決は間違ひなくひっくり返る」と言った。張はひとに向かつて胡巖のことを「胡公」と呼び續けていた。かくも人心が缺如していたのだ。

貞女の外祖父は金炳と言った。金炳の父・楷は成化乙未の會試で二番だった。涪州知事となつて亡くなつた。貞女が死んだ時、金炳の家は近くだったため、早くに行つて貞女の死體を見たが、金を受け取ると何も言わなかつた。母方の親戚がその金をたくさん手に入れたので、張耀も色氣を出したが、親戚が意見したため思い止まつた。

私は貞女の事件をすでに詳しく論じている。さらに「(こうして)裁判について書き、世上の轉變を記録した。この一事をとつても、ころころと變わりどこに向かうかわからない。天道のまだ存在することだけが頼みである。嘉靖二十七(一五四八)年七月に記す。

(「張貞女獄事」)

細部のズレはともかく、事件の経過と裁判の経過のそれぞ

れについて言説を残していることに、歸有光の事件への關心の持續を見ることが出来る。しかし、これらふたつの言説を書いた理由は、直接明らかにされているわけではない。いずれの言説においても末尾に執筆縁起めいた文言が見える。しかし、そこには「以上、書いてみた」という程度以上の意味はない。

勿論、見かけ上、事件の経過や裁判の経過に歸有光が殘虐さや不正を見て義憤のようなものを感じたために、張女の事件とその裁判について記録したと讀むことはできるかもしれない。實際、かかる讀みを成り立たしめ得る言説が残つてゐる。

先日来、張氏という女性の件で、ひとはみな憤つております。私は知人を頼りに、手紙を出して理解してもらい、いささか匹婦の恨みを晴らしたいと願つております。私は愚にして賤であるため、普段はお役所の政事に關わろうとしたことはありません。ご教示頂いたことへのお返事を差し上げますが、不十分な點は、自分を省みて、何も申し上げずまい。ただ、あなたがこの間の事情を疑つておられるのは、先に聞かされた言葉に惑わされていて、ひとびとの言つてゐることをご存知ないからでしょう。安亭の數百戸

のひとつとは、七、八十歳の老人から小さな子供に至るまで、烈婦の無實を語っています。詳しい話も大まかな話もありますが、節義を守って死んだとする点では變わりません。悪人どもが犯した惡事について、詳しい話も大まかな話もありますが、仲間で猥褻な行爲を働き殺人をしたという点では變わりません。

(略)さて、記事文をもう一篇差し上げます。<sup>(6)</sup>いくらか詳細です。これは全てひとつとの談論〔原文「衆人之論」〕から出ています。

(與唐虔伯書)<sup>(7)</sup>

しかし、この言説によれば、事件に關する言説はひとつの噂を材料としていたらしく、また噂とは異なる情報やそれに基づく立場も存在したらしい。歸有光が義憤を感じていたとしても、その義憤を自明のものと見なすことはできない。歸有光が噂を信じた根據を問題としない限り、義憤の意味は定かではなく、それ故、歸有光が張女について書いた理由を義憤であるとする意味も可否も、定かではない。

歸有光は張女を「貞女」と呼び、また別の言説では「烈婦」とも呼ぶ。見かけ上、歸有光が張女について書いたのは、噂の中の張女を徳性の女と見(て、そして義憤を感じ)たためで

不良に殺された貞女(材木谷)

あるという説明が、可能かもしれない。

しかし、噂の中の張女が徳性の女であることの直接の根據は、邪な姑や不良たちに従わなかったことや、不平を言わなかったこと、舅の深酒を諫めた程度の「正しさ」である。突き放して考えるならば、むしろ殘虐さや不正に係る被害者であつて初めて、相對的に徳性の女と見なされ得る存在に過ぎないと言えるのではないか。

徳性と被害者性が互いに關連しているとして、不貞の果ての自殺ではなく不良に殺されたという噂を先に信じなければその徳性は信じられず、一方では、不貞の女ではなく徳性の女であつたという噂を先に信じなければ殺されたと信じることはできない(歸有光が何となく噂を信じたとするならば、そもそも議論する必要はない)。義憤を感じるほど噂を信じたということと、張女が徳性の女と見なされ得たということと、それぞれの内容も、相互の關係も、このままでは明らかではない。

#### 註

(1) 「張貞女獄事」では、父の名を「耀」に作る。

(2) 原文「嚴入犯貞女」。「與唐虔伯書」(本章註5を参照された)に「またあるひとつは烈婦の死について、悪人どもの威力を



以てすれば、穢れのないままではいられなかったらうと疑っています。そもそも烈婦がかりそめにも節義を失したのなら、きつと死に至ることなどなかったでしょうが、實際に死んでいるのです。この死によつて事は充分に明らかです」とある。歸有光は強姦が未遂であると考へていたらしい。拙譯はそれに従う。

(3) 原文「見嚇然死人」。「嚇」は「赫」に通じるので、ここでは「嚇然」を「赫然」と見た。ただ、他の言説は死體がバラバラであることに觸れていない。

(4) 『四庫』一二八九—五八。

(5) 『四庫』一二八九—五九。

(6) 原文「續上記事一首」。この部分や、次章で見る「與股徐陸三子書」などからすると、事件の経過に關するもうひとつの言説が、「書張貞女死事」と同じ時期に存在したらしい。張傳元・餘梅年『明歸震川先生有光年譜』（臺灣商務印書館一九八〇年七月初版）は、「書張貞女死事」に對して、「續書張烈婦事」の存在を假定している（三十一頁）。その場合、「書張貞女死事」が初稿で、他に決定稿が存在したということになる。しかし、本稿では、結果として残っているということを重視して、「書張貞女死事」が決定稿であり、それに先立つ言説が書かれていたと考へる。

(7) 『四庫』一二八九—九一

## 2 對象としての望ましき

歸有光は判決後の言説で次のように言う。

益舟が戻り、諸公の義舉について詳しく話してくれました。とても喜んでいます。以前紛々としていたのは、ただ、主犯が網にかかっておらず、「張」烈婦がでつち上げを被ることは、千古の痛恨事と思われたため、發奮して他のことを考えられなくなったということに他なりません。今、諸公がこうして「張女を」賞賛して下さったおかげで、この女性のことが白日の下に曝されたのは、誠に氣分のよいことです。私とこのあたりのひとは、たちまち氣持がすっきりしました。これ以上、何の問題があるでしょう。

私はあなたと知り合つて數十年というものの、ずっと日の目を見ずにいますが、今となつては、名聲を求めようとは思いません。ただ一篇の記事文こそ、私自身、必ずや後世に傳えられるものであると思います。若い頃から『史記』『漢書』を愛讀しましたが、私の氣持を刺激してくれるような事柄には出會つたことがありませんでした。ただこの女性だけは、まあ満足できるし（原文「差強人意」、また實際に見聞したので、書いてみました。いくらか眞實を捉

えているでしょう。しかし、世人の間で文を知る者はたいへん少ないので、後世に示すものです。

益舟が言うには、虔伯もこの文が判決文と符合していないと疑っているとのこと。これは特に不可解です。取り寄せてよく調べてみて下さい。符合していないことなどありません。まして、歴史家というものは事實をありのままに書く可きです。ひとの様子を氣にする可きでしょうか。もしそうであるなら、昔から南史も董狐もいなかっただしう。

(「與李浩卿書」)

この言説は、歸有光という歴史家が、望ましい記述の對象に出會つたということを説明している。噂から、記述す可き對象としての張女が発見され、そこに殘虐さや不正も発見されたということになる。義憤は二次的である。つまり、歸有光が張女について書いた理由としては、義憤よりも、噂の中の張女を徳性の女であると見なし得ることの方が重要だったということになる。

噂の中の張女が歸有光にとつて記述す可き對象たり得たのは、噂の中の張女を徳性の女であると見なし得たためであるとして、前述の通り張女の徳性は相対的な問題である。それ

不良に殺された貞女(材木谷)

故、張女が本當に徳性の女であると言えるかどうかを今ここで問題にするには、あまり意味がない。より具體的なのは、歸有光が噂の中の張女に徳性を見た根據の検討であると考えられる。

〔張〕貞女の事件を聞いて、諸君子は悲しみ、烈丈夫の氣風を抱いています。〔私は〕力になりたくても及ばないので、記事文をもう一篇差し上げます。前に書いたものは、たいへん大雑把なので、こちらを證言としてください。これはみな人々の話に取材したもので、一語として修飾はありません。ただ歴史家の方法としていかなるものかと思うだけです。若い頃、本を讀んでいて、昔の節義の事例を見ると、いつも嘆息し、涙を流し、生きる時代が違っていることを残念に思いましたが、今になって、はつきりと見聞しました。

(「與殷徐陸三子書」)

この言説は、徳性の女と同じ時代に居合わせたことへの感動を語るのみならず、歸有光が、噂の中の張女を、若い頃に本で讀んだ昔の節義の事跡に比せられる點において、徳性の女であると見なし、望ましい記述の對象と見なししていたというところをも明らかにしている。

歸有光は如何なる節義の事跡を思い描いていたのか。何か

の故事が直接言及されているわけではない。しかし、節義の事跡に必要だった條件は次の言説によつて明らかになるだろう。

嘉靖甲辰（一五四四年）五月、安亭鎮に張氏という十九歳の女性があった。姑は脅迫し凌辱し、惡事を働く仲間にしようとしたが、「張女は」従わなかった。ある夜、惡人どもがこの女を部屋で襲った。火を放ち死體を燃やそうとしたが、天は風を吹かせ、火を消してしまつた。惡人どもは協力して「死體を」持ち上げて火中に投じようとしたが、死體は石のように重く、持ち上げられなかった。その三日前、縣には古くから貞烈廟（原文同じ）があるが、廟の近所のひとは天上に鳴り響く鼓樂を聞いた。火が柱の中から出て、轟々と音を立てた。縣令は直々に參拜した。時に早魃で三ヶ月も雨が降らず、士大夫は祭文を書くばかりだったが、注ぐがごとき大雨が降つた。惡人どもが天に向かって拜むと、たちまち兩脇から血が流れた。縣令は姑の死體を壇上に曝し、家人に死體を收容させることを禁じた。家人が夜に死體を收容しようすると、雷が鳴り、あらが降り、數百という幽靈が泣きながら追つて來たので、死體を放り出して逃げた。役所は通告を出し、張女を檢死したが、暑い季節に

三ヶ月経過していたのに腐敗しておらず、横になったまま硬直しており、皮膚も肉も生きているかのようなつた。首と脇腹に切り傷がふたつあり、血が流れていた。檢死人は驚き、「こんなことはなかった」と言つた。ああ、不思議なことである。昔の傳記で、忠烈の事跡を載せているのを讀むと、たいいてい怪異（原文「神異」）が発生している。今日、この事件を見て、ますます信じるようになった。これで、節義は天道が守ってくれるものの、全く害を被らない程度までは守られないということがわかつた。<sup>(3)</sup>何故であらう。悲しいことである。

（「張氏女子神異記」<sup>(4)</sup>）

この言説によれば、歸有光が張女のことを本で讀んだことのある事跡に比した時、怪異の有無を條件としていたことがわかる。歸有光は怪異の發生を根據に噂の中の張女を徳性の女と見なし、彼女について書いたということになる。つまり、彼女について書いた理由は、怪異の發生に歸せられる。

ただ、早魃終了後に書かれたことが明らかな「張貞女獄事」「張氏女子神異記」が、怪異をそれと明示して取り上げているのに對して、先に書かれている「書張貞女死事」では怪異を明示的に取り上げているわけではない。そのことだけに着目

するならば、怪異は「書張貞女死事」ではまだ意識されておらず、「張貞女獄事」「張氏女子神異記」に至って初めて意識されているかのように見えるかもしれない。そのため、怪異と張女の徳性とはもとは関係がなく、例えば、重要な出来事であり得る、早魃の終了を契機として、後から付け加えられたかのようにも、見えるかもしれない。

しかし、縣學の學生に事件のことを訴える言説によれば、私はもとより諸公のご高誼には敬服しております。「張女を」率直に賞賛できるのは諸公だけだと思います。釋菜の儀式と軍事教練の後で、ひとの批判を恐れず、烈婦の疑いを晴らし、東南數千里の早魃を救つて下さるよう望みます。

（與嘉定諸友書）

歸有光是早魃の最中から張女と早魃を結び付けて考えている。また、最も多くの怪異に言及する、その意味では最も後に書かれたと思われる「張氏女子神異記」に見られる話題の内、「書張貞女死事」は、張女の死體の異常な重さと、「烈婦の祠」（貞烈廟）と同じものである）の異變に、言及している。たとえ「書張貞女死事」が、單なるエピソード程度にしかそれらの話題に觸れていないとしても、それらの話題は「張氏女子神異記」と共通である。そこから、一貫した怪異への意識の

不良に殺された貞女（材木谷）

存在を想定することができらう。

「張貞女獄事」には、「張氏女子神異記」の話題の内、張女の死體の状態、早魃、張女の姑（汪客の妻）の死體を引き取るのを妨害した幽靈のことが現れている。逆に、「張貞女獄事」に言う縣令の異夢のことは「張氏女子神異記」に見られない。恐らく、これらの言説は特に系統立てて書かれたものではないのだろう。その意味では、言説間における記述の出入りは、「書張貞女死事」當時まだ終わっていなかったと思しい早魃のことを除けば、大した問題ではないと考えられる。

怪異への意識は、「書張貞女死事」の後、早魃の終了を経て、「張貞女獄事」「張氏女子神異記」にかけて強められたと見るのが適當であろう。つまり、「書張貞女死事」「張貞女獄事」「張氏女子神異記」の怪異への言及の様態の差は、意識の有無の問題ではなく程度の差に過ぎないということになる。

張女は貞女であるとひとへは言う。また張女は怪異を起こしているひとへは言う。本で讀んだことがあるように、昔から徳性の女には怪異が付き物である。だから張女は徳性の女だ。だから望ましい記述の対象であり、また、不貞の疑いを晴らすことが必要である——歸有光の思惟はこのように單純化できるだろう。「だから」の、ひとつめには論理的な無理があるし、

ふたつめには一般的な必然性はない。そもそも、ある対象を書く理由には、論理的な正しさなど必要ないのかもしれないが。

## 註

(1) 『四庫』一二八九—九二。

(2) 『四庫』一二八九—九四。

(3) この部分は、例えば、あの「天道は是か非か」という問いへの答えと見ることができるかもしれない。そう見ることができるとすれば、この部分は司馬遷と同質の思惟構造によることになる。そのことは、司馬遷が歸有光にとつて尊敬すべき史家であつたことを意味するようにも、歸有光の思惟が司馬遷の水準を超えていないことを意味するようにも、その兩方を意味するようににも見える。ただ、どの意味を見る可きなのかはよくわからない。

(4) 『四庫』一二八九—二六五。

(5) 原文「不恤一言」。ここでは「一」を「人」の誤りと見た。

(6) 『四庫』一二八九—九三。

## 3 結び

歸有光は、噂から、張女が怪異をもたらす徳性の女であると見た。したがって、歸有光は張女について書いた。

彼は自己の言説が正史に採られることを願っていた。彼が

張女の事件について知つたのは科擧に失敗して安亭に歸つた時だつた。國家という（彼らの文脈における）普遍性に關與するための科擧受験に失敗した男が代償として正史という（彼らの文脈における）普遍性に關與しようとしたという物語を、一連の言説から紡ぎ出すことができるかもしれない。

前述のように、歸有光の言説は『明史』の探るところとなつたようである。「書張貞女死事」を要約したらしいその記述において、張女の死體の異常な重さと「烈婦の祠」の怪異は、確かに言及されている。